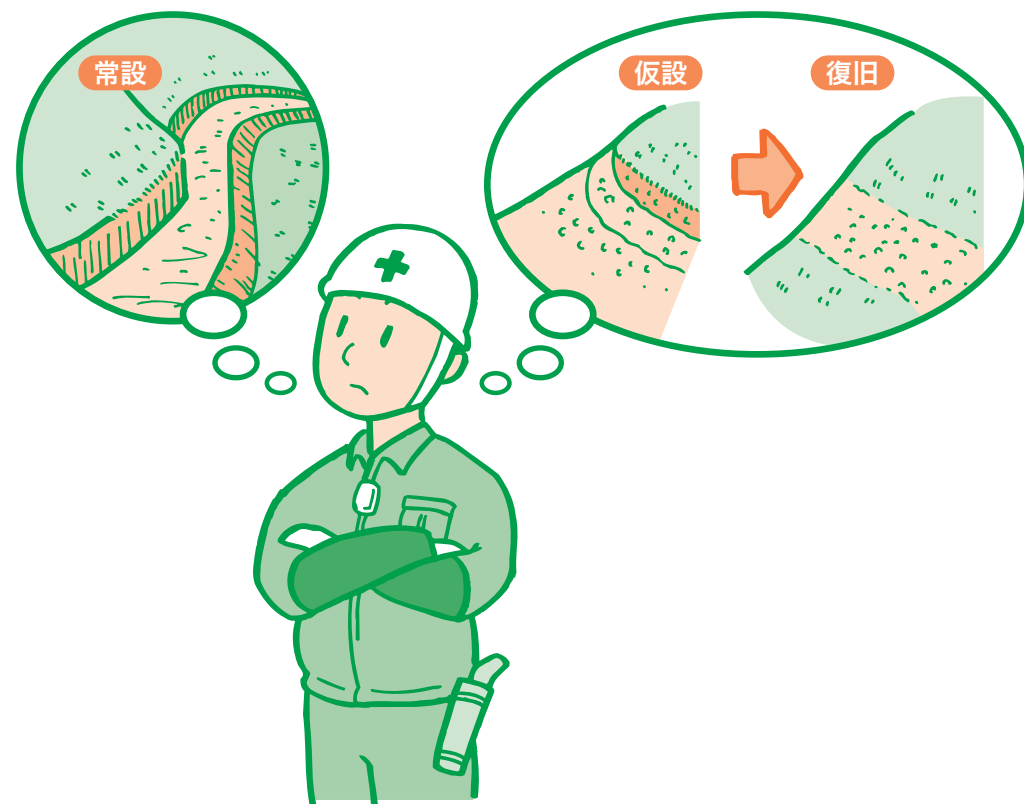


1. 使用目的に応じた開設

現代の林業に道は欠かせません。しかし、道といっても、その用途や規格は様々です。道を作るときは、その後その道がどのように使われるかをよく考えて、効果的で環境への負担の少ない道作りをしましょう。

- 道の使用目的や作り方について、所有者や造林者と事前に話し合っておくことで、トータルでコストを抑え、使い勝手のよい道作りに努めます。
- その後も造林や保育などで使う道は、路面や法面を安定させ、その後の維持管理が楽になるように、しっかりと作ります。また、後々の使い方を想定して、無駄のない配置を心がけます。
- 一度の伐出に使うだけの枝道などがもしあれば、後で埋め戻しなどをして山に戻すことを考えながら、無理なく作ります。



2. 林地保全に配慮した路網・土場配置

森林は、山の斜面から土砂が流出したり崩壊が起こることを抑える働きをしています。しかし、そこに道を作ると、それをきっかけに土砂の流出や崩壊が起こることがあります。これを避けるためには、現地の状況をよく把握し、道や土場をどこに作るかを注意深く検討することが大変重要です。

- 作業を始める前に、現地をよく調べ、地形、土質、地表面・地下水の流れをできるだけ把握します。湧き水や、土砂崩れの跡、地割れなどは危険箇所を知る大事な手がかりです。
- 土砂崩れの跡や地割れのあるところ、傾斜が35度を超えるところに道を作るのは避けます。
- 道や土場を作ると、路面・法面の土が露出し、そこから土砂が谷川に流れ出します。これを抑えるために、道や土場はできるだけ谷川から離して作ります。
- 道が谷川を渡ることも、できるだけ避けるようにします。
- 特に粘性土は河川に流れ込むと濁りの原因になるので、注意します。

